

子ども時代と私

蕪木 壽江



小学校三年の夏

「てがみは、つきましたよ、とてもうまいといつて皆

がほめました。僕は九日に行けないでしうから、ようがあつたら、てがみを下さい。すぐ行きます。それ

から、おふろにあるおゆの出る所はきをつけなさい。

とてもあついですよ。お母さんが、てがみをたくさん

下さい、つておっしゃいましたよ。おかあさんは、も

うだんだんよくなりましたが、安心して下さい。さ

ようなら「吉田薰壽」千葉県の大貫海岸に臨海学校に行つた時の、五歳年上の兄からの葉書です。

川崎・9・8-12のスタンプが、今も消えずにあって、仏様の下に大切に仕舞つてあります。

母から離れて、しばらくぶりで帰つて来た横浜の港の燈の輝きに、懐かしくて何故か胸がいっぱいになりました。その一週間後の夜に学芸会があり、松・竹・

梅組から一人ずつ選ばれて、校庭の舞台で踊りました。私は、うす緑の紺縞に薄いピンクの花柄のある着物に、^{兵児帯}は、三つのお祝いの時のピンクの^{扱き}でした。学校の入口までハイヤーで来て、それから兄が母を負ぶって来てくれました。「良かつたー良かつたー」と、何遍も言っていたそうです。今では工業都市の川崎もその頃は田舎で、小学校の裏に小川が流れていて蛍が五、六匹とんでいて、暫らく母もそれをじっと眺めていたと、兄から聞かされました。

母が逝ったのは二十二日でした。その前日、「お母さんが死んでも泣かないのよ。このお人形さんをお母さんだと思って遊んでね」と、仏様の下から、箱に入ったフランス人形を出して抱かせてくれました。お葬式は、近所の方々や親類の方、お友達が大勢で賑やかでした。一年生の時から受持ちの、大好きな後藤先生のお顔を見た時は嬉しくて、急に涙がとまりませんでした。

押入れの中に、母の作つて下さった新しい三人の四

^{幅布団}がありました。名前が書いてありました。私は真綿が入っていました。母の日本髪の手綱^{てがら}を合わせて縫つた少し小さいお布団もありました。どれもお母さんの匂いがしていました。大きくなつて困らないようになると用意して下さつたのでしょうか。

父は、私が六歳のクリスマスに亡くなり、母は祖父母の隠居所にしていた川崎に、お庭統ぎで家を建てて引越しました。

亡夫はセルロイドの玩具輸出商で、アメリカ始め、ヨーロッパ各地、チエコスロバキア等と、取引きをしていました。日本橋小伝馬町にビルがあり、外人のディーラーがくるので、靴で上れるように、赤い絨毯が家中に敷いてありました。日本では見られないセルロイドに同じ色の和紙を張つた動物（象、ライオン、虎等）にしてもサイズが小さいだけで本物そつくりのミニチュアがありました。大きなキューピーさんもあり、工場は横浜にありました。

中学二年の兄は、お母さんのような存在で、中学一

年の兄はお父さんのようにでした。学校から帰つて来る
と、いつも兄達は、私を自転車の後ろに乗せて、ピン
ポンや野球をする時は学校へ連れて行つてくれまし
た。ガードのある土手では、体を横にして下までグル
グルとまわり藁だらけになつたり、近くのたんぽで
は、おたまじやくしを取つたり、蛙を掴まえたりと日
暮れまで遊びました。

五寸釘

家の中の整理をするから、といつて私達三人は、祖
母の家に行きました。祖父は背中にお経の書いてある
白い着物に着替えて、四時頃からお経をあげるので
す。その前に、お水やお茶をお供えし、祥月命日の仏
様にはお膳をあげるので、女中さんのお手伝いをして
いました。

「お母さんに会えますように——」「会いたい、どう
しても会いたい」の一念でした。祖父は、よくお母さ
んに会えます、「壽江のことが一番心配だと言つてい
た。女中さんの言うことを聞いて、『お母さんはそ
うじゃない、お母さんはこうする』と、いちいち言わな
いように……と、言つていた」と……。私のお経はだ
んだんと大きな声になり、テニヲハは違つても、意味
が通じなくとも祖父について合わせていました。けれ
ど、一度もお母さんには会えませんでした。

祖父は、深川の材木問屋の近忠商店だったので、総
檜造りの広い家でした。その屏に五寸釘で、

「かわいそうなどしえ」

と、力を入れて並べて書いては、「お母さんのところ
に行きたい」と、涙をこぼしていました。上の兄はそ
れがつらく、「壽江が、又、『お母さん』って泣いてい
る、お母さんを恋しいのは俺だつて——」と、書かれ
てあるお兄さんの日記を見て、「ごめんなさい、もう

泣きません」と眼を拭いていました。兄が仏様の所で顔を伏せているのをその後見ませんでした。

動物ビスケット

病気で寝ていた祖母が亡くなり、毎日のように、母の親類や従姉達が、祖母の所に来てくれました。珍しいものがあると届けて下さったり、これは「お兄さん達にもあげてね、一緒に食べるのよ」と、声をかけたりして、笑わせて帰つて行きました。おばちゃん達はお人形さんのお布団や、着物を作つたり、お菓子の箱を包んであるのし紙や、綺麗な包み紙を集めて持つて来てくれました。

見ただけで中味が伝わつてくるおいしそうな紙を見た。兄は手先が器用で、中学の服を裏返えしたり、私の宿題の割烹着を本所まで行つて従兄の家で縫つて来てくれました。得意なのは散髪で、私のおかげで中味が伝わつてくるおいしそうな紙を、いっぱい食べました。ちょっとしょっぱくて、ほんのり甘くて、兄弟の思い出の味になりました。私の髪のギザギザなどなんのその、威厳のある祖父にかくれて悪さをする楽しさがあとを引いて、度々、夕飯を残し



切つたり、貼つたりして、友達と着せ替え人形を作つたり、反物屋ごっこに使つて並べたり、折紙のようにして、大きな風船を作つてつきつこをして、来る日も、来る日も友達と一生懸命に、遊びました。その時だけ母の事は忘れることが出来た様な気がしました。又、お庭でかくれんぼや、鬼ごっこをしたり、床が高いので、その中に入ると、なかなか見つからなくなつて出てきたり、ござ敷いてママ人形と、おままでなど、飽きることがありませんでした。

小さい兄は手先が器用で、中学の服を裏返えした

り、私の宿題の割烹着を本所まで行つて従兄の家で縫つて来てくれました。得意なのは散髪で、私のおかげで中味が伝わつてくるおいしそうな紙を、いっぱい食べました。ちょっとしょっぱくて、ほんのり甘くて、兄弟の思い出の味になりました。私の髪のギザギザなどなんのその、威厳のある祖父にかくれて悪さをする楽しさがあとを引いて、度々、夕飯を残し

ました。

勉強部屋の窓と、祖父の茶の間の窓とは二米メートルぐら
いしか離れていないので、祖父が、お風呂のタオルが
ビショビショだと、廊下が汚れているとかいつて怒
ると、三人でその窓を開けて、「ハゲタタイテナメテ
ミナ、シンタクワソノアジガスル」と大声で声を合わ
せました。

上の兄は棒高飛びが上手で、すぐ隣の原っぱを整地
して砂を敷いて、家から母が治療に使ったバイタライ
トランプ500Wを照らして練習していました。大会に出
て二位になったことがあります。関口君がいつも一位
なので、兄の友達の名を覚えたりしました。

ハーモニー

三人寄るとすぐ歌がでます。お兄さんは、バリト
ン、小さい兄はテナー、私はアルトで、どんな歌でも
すぐハーモニーで歌える兄達でした。ある日近所の人
が「吉田さんの兄弟は親がないのにどうして明るい

の?」と、顔を覗いて言いました。兄は「音楽がある
から——」と、すぐ答えていました。なんていい言葉
だろう、と言い直してみました。

お正月には、兄達について、いつも百人一首をする
近くのお姉さんが三人いる家まで行きました。畳で取
ると、衛生的でないと言つて、畳屋さんの台のような
ものが出来ていて、和紙が何枚も貼つてありました。
私は、みかんと南京豆を頂いて炬燵の中に入つていま
したが、読み手がない時は読んでいました。母がい
た頃、晴着を着て百人一首を取つて、兄とぶつかり鼻
血が出てとまらず、母が『大江山幾野の道の遠けれ
ば——』は、壽江が覚えたばかりだから、お兄さん達
は取らずにいるのよ』と、言つていました。



セーラー服になつて

女学校の入学試験なのに熱が高く、肺炎だと診断され、注射を太股に打つて、兄に負ふさつて試験場に行きました。教室でも何回もタオルに吐いて苦しみながら終りました。体操の試験では、歩けないので兄に抱まつていると、先生が「313番、無理しないで座つていなさい」と、椅子をすすめて下さいました。下の兄は隣のお姉さんが作つて下さつた海苔巻を持って来てくれました。折角のお弁当は食べられませんでしたが、又、兄に負ふさつて帰つてきました。試験は合格していました。

卒業式の日には祖父がついてきて、「一年の時から五年間、総代で免状を貰つていますから、練習しないで大丈夫です」と、受持ちの先生に言いに行つてくれましたが、級長だったのに代わりの人が出ました。

女学校では、バレーボールの選手として神宮外苑で活躍した思い出があります。

上の兄が兵隊に行き（外地）、ぽつかり穴があいたように寂しくなりました。兄はよく葉書を書いてくれました。その度に、その便りを握つて、無事を祈りながら祖父の家の仏間に寝ていました。下の兄も兵隊に行き、休暇で帰つて来ると、祖父が告げるのか「壽江は小学校の先生になるのに、おじいさんの言うことが聞けないでどうするのです。よく反省しなさい」と書いて、軍隊に帰つていきました。

幼稚園の先生になつて教育実習生の卒論を見て頂く為に、何回か丁先生をお訪ねしました。「蕪木先生つて不思議な方です。記憶にない以前に、どんなにかご両親に愛されて、大切に育つたかがわかります」と言われました。

胸を押さえて家に帰り、写真の両親に感謝しました。ありがとうございました「お父さん、お母さん」。

（元・市ヶ尾幼稚園）